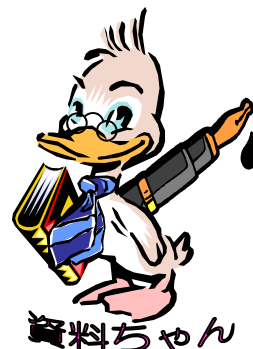


資料室 ニュース Vol. 26

2005年10月27日発行



読書の秋。資料室では、「鯨絵」の壁面展示や手作り防災グッズの紹介など、親子で学べる企画が盛りだくさん。ぜひ、お立ち寄りください。



「震災資料の活用」をテーマに研究会開催

「第4回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」（神戸大学文学部地域連携センター主催）が10月3日、人と防災未来センターで行われました。震災資料を保存・公開している資料室・自治体職員、大学教員、約30人が参加し、震災資料の活用のあり方について話し合いました。また、「～震災を伝える一次資料から～」シリーズでは、当センターが所蔵する様々な一次資料をご紹介します。

～ 震災を伝える一次資料から ～

No. 2

一次資料：避難所で使用されたモノや手記、メモ、チラシなど「生の」資料(原資料)のこと

「ボランティア活動」で、元気ももらった 10年間の活動記録を提供した長岡照子さん(79) = 西宮市在住 =

趣味の山登りなどを一緒に楽しんでいた夫が1994年秋に急死。そのショックから少しずつ回復しかけた頃、阪神・淡路大震災が起り、心の支えにしていた弟を震災で亡くしました。弟は戦争で右腕を失いました。「戦争を勝ち取った命が、なんで震災でなくなるんや」と今でも無念と語る長岡さん。自宅のマンションで、下半身を家具に挟まれる、といった被害も重なり、心身症に陥りました。

心の苦しみをやわらげるために始めたのが、ボランティア活動。震災直後、同じような仮設住宅の中で、自宅がわからなくなった被災者に出会いました。そこで考えたのが、表札作り。身近にあるかまぼこ板に、花や鳥などの絵をあしらった表札作りを始めました。「絵を描いている間、心がなごやかになった」と語る長岡さん。約1500個を制作、西宮市内の仮設住宅5000戸を訪れ、1年がかりで配って回りました。

同時に、ボランティア団体にも所属し、震災後5年間、炊き出し、バザー、お茶会などの被災者支援活動に没頭した、といいます。現在は、人と防災未来センターで語り部としても活躍中です。今回、寄贈された資料は、西宮市内の仮設住宅・復興住宅などで、ボランティア活動の様子を撮影した写真や活動を記した紙・モノ資料約250点。被災者との膝を交えた数々の交流から、被災者の足跡やニーズが浮かび上がってきます。

「仮設住宅にいたお年寄りが次々と亡くなっています。震災後の厳しい現実をすべて見てきたように感じます」と長岡さんは振り返っています。



訪問した仮設住宅の地図を持つ長岡さん

「第4回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」

レポート

10月3日に人と防災未来センターで開催された研究会の主な内容を紹介します。

北但馬震災の資料発掘の経過と教訓

まず、阪神・淡路大震災後、農村漁村における震災事例を調査をする中で、北但馬震災（1925年5月23日）の救援記録を発掘した深井純一・立命館大学教授が、その経緯を説明しました。深井教授は、被災地の豊岡市立図書館に訪れ、司書の協力を得て、郷土資料のすべての目次から本文までを丹念に確認。豊岡高校が発行した『豊高八十周年記念誌』の口絵写真に、救援活動に関わった旧制豊岡中学校の生徒の作文を見つけました。さらに、同校を訪れ、図書室に未公開の生徒の作文604人分を発見。同窓会名簿などを元に、存命の執筆者と、手紙や対面による交流や聞き取り調査、許諾などを行い、作文記録集の出版・公開に到りました。



震災資料の調査体験を語る
深井純一教授

「資料作成者や保存者にいかに接近し、協働をいかに実現するか」が重要とし、「資料の保存者や『生』の証言者により、資料が補充され、その協力の程度により、資料が補強されていく」と話しました。

人と防災未来センター資料室を利用して



資料活用のためのガイドが必要と語る山口一史氏

「ひょうご・まち・くらし研究所」常務理事の山口一史氏は、11月から始まるボランティアコーディネーター養成講座（人と防災未来センター主催）の講師。受講生に被災者の苦しみを理解してもらおうと、教材作成のため、同センター資料室の約200点の震災資料を閲覧してきました。資料閲覧を通して、「寄託者は、パブリックに役立ててほしい、震災からの学びを市民に受け止めてほしい、と感じているのでは。資料を用いて、ある種の客観的な知見を出してほしいと思っている。そういう意味で、バリアを作らない方が研究の効果も上がるだろう」と述べました。

震災資料の活用の課題

同センター資料室からは、震災資料の公開作業の推進状況や、インターネット上での一次資料の目録検索システムの運用開始（今年6月～）など、公開や活用の現状について報告しました。また、参加者から、震災資料の使用例の蓄積や震災資料関連機関のネットワーク化やデジタル化の推進、行政文書の保存・公開のあり方やレファレンス（情報調査）の充実など、様々な意見が出されました。

資料室壁面展示

資料室（2階）西側の壁にて展示しています

なます え

鯰絵ってなあに？

～江戸時代の人々と地震観～

平成18年1月15日(日)まで展示

安政大地震（1855年11月）の直後から、江戸で爆発的に流行したといわれている鯰絵。同展では、その出現から江戸庶民の間に広まっていく過程を通して日本古来の地震像を振り返り、当時の人々の地震観を、時代背景および文化的な側面から紹介しています。

<展示内容>

- ・ 鯰（なます）ってどんな生き物？
- ・ 安政江戸地震の概要
- ・ 「鯰絵」（なますえ）ってなあに？
- ・ こらしめられる鯰
- ・ その他のいろいろな「鯰たち」...あやまる鯰、後悔する鯰、教訓を伝える鯰、守り神になる鯰他
- ・ 世直し鯰と終焉



「鯰絵」とは「地震は、鹿島大明神の要石（かなめいし）に抑えられている地下の大ナマズが暴れて起こす」という俗説に基づき、安政大地震後、わずか2カ月間の間に200種類以上が発行される大ブームとなった絵のこと。

新着図書

資料室内には、フラワーロードの周辺景観について、震災前・震災直後・現在の3つの時点を3次元GIS（地理情報システム）で再現した「阪神・淡路大震災“わたしたちの復興”プロジェクト」を展示中です。50インチのタッチパネルディスプレイにぜひ触れてみてください。



題名	著書	発行者
津波防災を考える「稲むらの火」が語るもの	伊藤和明	岩波書店
津波!!命を救った稲むらの火<絵本>	原作・小泉八雲、文・絵・高村忠範	汐文社
山古志村ふたたび	中條均紀	小学館
新潟県中越地震 文化遺産を救え	矢田俊文	高志書院
アチエの声	佐伯奈津子	コモンズ
津波の恐怖 - 三陸津波伝承録 -	山下文男	東北大学出版会
防災力！宮城県沖地震に備える	大竹政和	創童舎
あなたの命を守る大地震東京危険度マップ	中林一樹監修	朝日出版社
大震災から身を守る耐震補強の知恵	松崎孝平	日本文芸社
夙川ひだまり日記<絵本>	直野祥子	小学館スクウェア
緊急災害と人事管理 Q & A	産労総合研究所編	産労総合研究所